

上津屋橋 〈流れ橋〉 について



【流出記録】

1953年(昭和28年)	8月15日	8月の豪雨
1959年(昭和34年)	5月25日	伊勢湾台風
1961年(昭和36年)	6月24日	梅雨の豪雨
1972年(昭和47年)	7月10日～17日	豪雨
1974年(昭和49年)	7月10日	豪雨
1976年(昭和51年)	9月8日～13日	台風17号
1982年(昭和57年)	8月1日～3日	台風15号
1985年(昭和60年)	6月21日～7月17日	梅雨の豪雨及び台風
1986年(昭和61年)	7月20日～22日	梅雨の豪雨及び台風
1990年(平成2年)	9月10日～20日	台風19号
1992年(平成4年)	8月19日	台風11号
1993年(平成5年)	7月5日	豪雨
1994年(平成6年)	9月30日	台風26号
1995年(平成7年)	5月12日	豪雨
1997年(平成9年)	7月26日	台風9号
2004年(平成16年)	8月5日	台風11号
2009年(平成21年)	10月8日	台風18号
2011年(平成23年)	9月3日	台風12号
2012年(平成24年)	10月1日	台風17号
2013年(平成25年)	9月16日	台風18号
2014年(平成26年)	8月9日	台風11号

【流れ橋の発想】

「流れ橋」の大きな特徴は、最初から流されることを計算して造られていることです。

これは、流れて構わない、初めから頑丈に造らずに流れたら造り直すという発想によるものです。それと同時に橋板が容易に流れることにより流木やゴミ等の漂流物が橋に引っ掛ることによって起こる堤防の決壊などの損害を未然に防ぐことができます。流れることによって被害を最小限に食い止め、橋板を紐等で連結しておくことによって水が引いたときの復旧がしやすくなります。

これは日本の降水量が多く国土の70%以上が急な傾斜の山林地帯という自然条件の中で、自然に逆らわず共存していこうとする生活の知恵が生み出したものであります。

【流れ橋の起源と特徴】

流れ橋は、もともと川幅の狭い所に木板を渡し、その木板が流されてしまわないように紐等で結んでおいたものがその原型だと考えられています。自然の飛び石を利用したり、川幅に合わせて造った橋脚に板を渡したものが橋に発展しました。

流れ橋は、その規模や構造によってそれぞれ違いや特色があります。単純に原始的な1枚板の橋ならば、ちょっとした増水でもすぐに流出します。しかし、上津屋橋のように橋板と橋桁が複雑に組み合わさり、ワイヤーロープでしっかりと橋脚に連結されている大掛かりなものになると、水位が上昇しても流出しにくいようです。初めて流出したのは、昭和28年、水位が橋面から約30cm程度上昇した時であると記録があります。

【流れ橋の由来】

「流れ橋（上津屋橋）」は、淀川の支流として京都府南部を流れる一級河川・木津川に架けられた、全長356.5mの日本最長級の木造橋です。梅雨や台風がもたらす豪雨のために水位が上がると、橋板や橋桁が流れ出すという特徴の構造をしています。

流れ橋は昭和28年（1953年）3月の架設以来、通算21回の流出を記録しています。

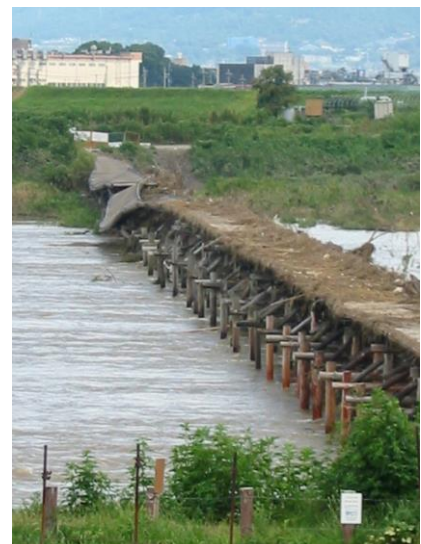
この橋の架かる地区では、江戸時代から明治の中頃まで木津川を挟んで両岸が上津屋村と呼ばれ、日常生活を送る住民はもちろん、八幡の石清水八幡宮に参拝する人たちも互いに渡し舟を利用していました。しかし、渡し舟だけでは不便だという地元の強い要望もあり、限られた予算内で、洪水時の水の流れを阻害しない構造であることをふまえ、現在の位置に「流れ橋」が完成しました。

一般的には、「上津屋橋」という名前より「流れ橋」で通っており、中学校の教科書などにも「名橋」として紹介され有名になっています。今でも城陽市と八幡市を結ぶ自転車歩行者専用道路として、朝夕はもちろん昼間でも多数の人々が利用しています。また白砂の河原と清流によく調和し、のどかな趣はテレビ・映画の時代劇等の撮影にしばしば利用されています。

このように約60年に渡って「流れ橋」は地元の人々の生活手段として気軽に利用されてきました。また、一方で、往年の土木技術者の知恵と工夫を今に伝える「文化財」としてのみならず、日本の原風景を今に残す場所として多くの人々に愛されています。

【流れ橋の構造】

流れ橋（上津屋橋）の構造は74径間の木造橋（全長356.5m、全幅員3.3m、有効幅員3.0m）であり、流れ橋という名のとおり、出水時には一定の水位（概ね橋面まで水位が上昇した時）に達すると全長を8分割にして橋脚に連結された上部構造物が流れる仕組みになっています



なお、全長356.5mというのは、木造橋では日本最長級であるといわれています。

上部構造物は末口22cmの杉丸太4本からなる橋桁の上に厚さ7.5cm、幅20cmの橋板が敷き詰められているだけの構造となっているため、水位が上昇すると、この橋が「川面に浮かぶ」こととなります。単に浮かぶだけだと下流へ流されてしまうことから8つに分割して、ワイヤーロープで繫留橋脚にがっちりつなぎ止められており、洪水時にはまるで上部構造物が筏流しをしているように見えます。洪水が去るとロープで繫ぎ止められていた上部構造物を再度敷き並べ、また元通り復旧することができるようになっています。

昭和28年といえば、まだ戦後間もない時期だけに、いかに安価でしかも洪水による損害の少ないものを造る、当時の技術者の知恵を絞った後がうかがえます。(資料提供：京都府山城北土木事務所)

やわた流れ橋交流プラザ四季彩館